

岡先生とラテン文学

小川正広

1982年の春に来日して京都でも講演をなさった英国の古典学者ケネス・ドーヴァー氏の滞日中の短いインタビュー記事（朝日新聞4月30日夕刊）は、私に深い印象を残した。それは「現代に脈打つギリシャの心」と題されたもので、その中で氏はまず、テオクリトスの一節を引用して古代ギリシア人の心理がいかに現代人のそれに近いかを示し、さらに、ギリシア文化はじつは西欧人が近代になって改めて自分たちの文化の「親」として選択したのであって、「歴史」とはそのような「有用な」ものを自分で選ぶことだと日本の大衆に呼び掛けている。なるほど、面白い見方だと思った。が、それ以上に私の関心を引いたのは、「核時代に生きる現代人は、本当に古代ギリシア人から学び得るものがあるのだろうか？」という記者の最後の質問に対するドーヴァー氏の返答だった。少し長くなるが、その部分をそのまま引用してみる。

古代ギリシアの諸都市だって、いつ戦争で全滅するかわからない不安の中にあったのだし、疫病、人口過剰、資源問題など、彼らなりの“社会問題”はいっぱいかかえていた。現代人との違いは単にスケール（量）の大小の問題といえる。それ以外の、人間が生きていくうえでの問題の質の点でどれだけ差があるといえるだろうか。

個人的な体験を語ると、1942年、私は士官として北アフリカに従軍していた。ドイツ軍にさんざんやられ退却に次ぐ退却。士気を失った部下は命令に従わなくなってしまった。そのとき私の頭に浮かんだのは、ローマ時代のウェルギリウスの詩『アエネイス』の中で、ローマ建国の英雄アエネアスが仲間たちに語りかけた「われわれにはもっと苦しい日々があったじゃないか。いまの苦勞だってそのうち思い出になる日がきっと来る」というセリフだった。私はラテン語を知らない部下たちに、英語で同じことを言った。兵士たちの反応は、アエネアスのセリフを聞いた後の仲間たちの反応と全く同じだった。古代人も現代人も心の動きは基本的に同じだという一つの証拠だと思うのだが……。

おそらく実際のインタビューでは、ドーヴァー氏は‘forsan et haec olim meminisse iuvabit.’という『アエネイス』第一巻の原文の詩句を突然口づさんで、記者の眼をぱちくりとさせたに違いない。だが、それよりもっと私を驚かせたのは、氏のギリシア人についての話が、いつのまにか「現代に脈打つローマの心」になってそれで締めくくられていることだった。

この身近なエピソードから、いくつかの推測が可能だが、何よりもまず、のちにギリシア学者として大成したドーヴァー氏にとって、古典の現代的価値に触れる若き日の体験がラテン詩の思わぬ効用の発見であったことは興味深い。そして、ギリシアとローマがこのように一体化して一人の学者の中に生きていることに、私は西洋の古典学の伝統というものを感じた。

さて私が学生か助手の頃、まだお元気に活躍しておられた故中村善也先生から、「岡道男はギリシアもラテンもやる、これはヨーロッパ的な古典研究の姿勢なんだ」というような言葉を一度ならずうかがったのを覚えている。中村先生自身、ギリシア悲劇の研究と翻訳の分野で大きな貢献を果たされながら、晩年にはオウィディウスの神話の語りの世界に沈潜していかれたから、今思えばそれは、他者を評しながら自己を語った言葉でもあったような気がする。そしてこの中村先生のラテン詩への傾斜について、亡くなられた1985年春の府立大学での追悼会で、今度は岡先生が、「西洋古典と中村善也氏」と題する文章を読まれて、その中で次のように語られた。

オウィディウスというローマの作家は、抑え難いパッションを好んで扱うこと、出来事を、あるときは現実的写實的に、あるときは幻想的なロマンスの世界の事柄として描き分けること、さらに、平明で洗練された文体を、ときには感覚・感性に強く訴える文体を駆使することなどの点において、エウリーピデースに共通するところがあります。中村さんが、晩年オウィディウスを好んで読まれ、その代表作を翻訳されたのも、若い時から抱いておられたエウリーピデースへの愛着の延長であったように思われます。

.....

翻訳の御苦労と御苦心については、私は何度うかがったか分りませんが、とりわけ強く印象に残ったのは、オウィディウスの『変身物語』を訳しておられたとき、たった一つの言葉を訳すのに丸一日を費した、と洩らされたことです。この物語の第九巻のはじめのほうにfortiterという言葉が出

てきます。これは、fortis(勇敢な)という形容詞の副詞形で、ふつう「勇敢に」とか「忍耐強く」とか訳されています。中村さんは、この言葉の訳について一日中考え、「毅然として」と訳されました。

.....

今ふりかえってみて、中村さんが何気なく語られた、それを訳するために一日のすべてを費やされたfortiterという言葉が、強く私の胸にひびきます。中村さんは、この「どうしようもなさ」が支配する世界にあって、学問においても人生においてもfortiterに、毅然として、不屈の精神をもって生きてこられた——そういう思いが私の胸を打つのであります。

再び、他者を評して自己を語った言葉だと思う。古典研究家として岡先生は、多くの人が知るように、ホメロスという巨塔を昇りつめ、ソポクレスの『オイディプス王』の深淵に挑み、アポロニオス・ロディオスとともに叙事詩の新しい海を渡り、さらにローマ世界ではテレンティウス、キケロ、ウェルギリウス、ホラティウス、プロペルティウスなど数々の先鋒の文学創造に光を照射してこられた。「毅然として」fortiter——このラテン語（そしてやはりラテン語でなければならぬのだが）は、今、先生の長い軌跡と、それを歩んでこられた後ろ姿を仰ぎ見る者の胸に、自然と湧いてくる言葉である。

ところで、エウリピデスへの愛着から中村先生のオウィディウスへの傾倒が始まったと語る岡先生ご自身もまた、ギリシア文学、とりわけホメロスの叙事詩に対する深い理解から、そしてそこから会得された叙事詩人的な透徹した人間認識から、社会的広がりの上に構築されたラテン文学の諸相に向かって探求の舵を取られた。1978年の「古代叙事詩の序歌」に始まり、1987年の‘Nox mihi candida. Propert.2,15 and Catull.68’に至るまで、私たちは合計六篇の先生のラテン文学論考を読み、貴重な指針とすることができた。また1992年には、松本仁助、中務哲郎の両氏とともに『ラテン文学を学ぶ人のために』を編まれた。この三氏を編者とする文学史の企画では、私たちは文字どおりローマ文学の「饗宴」を楽しみ、また互いに啓発し合うことができたが、この書の冒頭の文章の結びで、岡先生は次のように記された。

ラテン文学のすべての時代を通じて、詩は“humanitas”(人間理解、教養)と“doctrina”(学識)を培うものであるという考えは、ローマ人、ひいてはローマの文化に触れ、その教育を受けた者の間に深く根を下ろしていた。

キリスト教世界となっていたルネッサンスの時代に、異教徒の古典古代文学の精神が奇跡的によみがえり、新しい文化の原動力になることができたのも、このようなラテン文学の特性に負うところが大きい。ギリシア文学は、古典古代の名のもとに、ラテン文学を通じて近世・近代ヨーロッパへ伝えられることになった。この点においても、ローマ人の功績があらためて認識されるべきであろう。

ローマ人は、ギリシア文学を手本として、それをじつに真剣に学んだ。この謙虚でひたむきな姿勢の中から、次々と新しい着想の作品が生まれるとともに、ギリシア・ローマを文化的に一体のものと見、のちにヨーロッパの土壤に深く根を張ることになる「古典」(the Classics)という概念が成熟していった。そして岡先生は、ギリシア文学の高みから後進のラテン文学を見下ろすのではなく、ギリシア文学におけるさまざまな問題が、実際ローマ人によってどのように扱われ、生きた人間の課題としてどう受け継がれていったのかという点に関心の眼差しを向けて、ローマ的、いやむしろヨーロッパ的humanitasの発芽と発展のさまを、個々の作家に即し内側から丹念に考察された。そうした先生のローマ文学に対する親愛感あふれる試みが、上述の六篇の論考であるが、今ここに、若輩の一門下生であることを顧みず、それらのご成果の脈絡について自分なりに——そしていささかの個人的所感もまじえて——思い巡らして述べてみたいと思うに至ったのも、その一群の論文に見られる先生の問題意識の推移が、私には常日頃きわめて魅力的に感じられてきたからである。

古典学会へのデビュー以来（それは1959年の「英雄伝説として見たヘーラクレースのathloiの問題」『西洋古典学研究』7であったと推察する）、岡先生は英雄というものの在り方に対して深い興味を持ち、ホメロスははじめとする古代作家の英雄観を長い間情熱的に検討してこられた。その結晶は、言うまでもなく大著『ホメロスにおける伝統の継承と創造』（1988年）であるが、こうしてギリシア叙事詩の中に追究された英雄の問題は、ラテン文学の諸作家を取り上げる場合にも、引き続き先生の念頭にあったように思われる。

まず、ウェルギリウスの『アエネイス』を論じた「古代叙事詩の序歌——『アエネイス』について——」（『西洋古典学研究』26, 1978年）は、ローマ人の英雄観とローマ的叙事詩の性格を正確なテキスト解釈と広い文学史的パースペクティヴにもとづいて開示した画期的な論考である。改めて紹介するまでも

ないが、この論文で先生は、従来しばしば『イリアス』と『オデュッセイア』を暗示すると解釈されていた『アエネイス』劈頭のarma virumqueが、じつは二語一意で「勇武の英雄」を意味し、むしろ『オデュッセイア』の「知謀の英雄」という冒頭句を意識して用いられたものであり、さらにその句は、十行目のinsignem pietate virumと強く結びついて、武勇とともに敬神に秀でた新たなローマ的英雄像を提示するものであると論じておられる。いきなり個人的なことになるが、当時大学院生だった私は、この論文を読んですっかり敬服してしまい、もう『アエネイス』にはしばらく手を出さないことにした。それくらい、この論文が与えたインパクトは強かったのである。（その後助手になって自分の論文の構想で苦しんでいたとき先生自身からうかがったところによると、先生はこの論文の着想を、たまたま風邪で寝込んだときにふと思いつかれたそうである。私もまもなく同じように風邪を引いたが、当然ながら、いささかもそのような卓抜なアイデアらしきものは浮かんでこなかった。）

上の論文が出版されたのは、たしか先生が一年間のドイツへの渡航中だったと思う。不在中にこれを読んで勉強しておけ、ということであつたのかもしれない。ともかく雑誌論文の規模ながら、ご帰国までの半年間じっくり精読する価値はあつた。ところが、この論文は、先生の『アエネイス』論の序にすぎなかった。というのも、ご帰朝の翌年1979年の春、岡先生は『アエネイス』論の第二弾を、松平千秋先生のご退官記念の論集『ギリシア・ローマの神と人間』に発表されたからである。今度は「ウェルギリウスの英雄像——トゥルヌスの死——」と題されたもので、『アエネイス』解釈に関する国際的論争を背景として、作品全体の創作意図に関し、主人公アエネアスに敵対するトゥルヌスという人物の描き方に注目して論じた意味深い論文であつた。この論考では、学会誌とは違って一般向きの本であるためか、より平明なスタイルでこのローマ叙事詩の意味合いが述べられている。例えば、結論部の次の記述は、先生の作品解釈の奥行の深さを物語っている。

生は善と悪とからなるものでなく、また現実において善とされ悪とされるものが「時」の審判を受けるとき必ずしもそうではなくなることを詩人は知っていた。ローマとカルタゴが角逐していた時代にディドのような女性を描き出すことはウェルギリウスの詩才をもってしてもはたして可能であつただろうか。だが百年の歳月は仇敵に自己と同じ人間を見出す余裕を与える。ローマの宿敵カルタゴが減ってから百年を経てその女王ディドが

共感と同情をもって描かれたとすれば、アウグストゥスの時代から百年後の人々は、ウェルギリウスの同時代人がデイドを見たと同じ眼でアウグストゥスの敵対者を眺めるかもしれない。アウグストゥスによる「ローマの平和」確立の犠牲者として滅びた悲劇的人物として彼らを眺めるかもしれない。詩人は一たん約束したアウグストゥスを主人公とする叙事詩の執筆を思い止まり、かわりに、伝説・神話という普遍的人間の世界に題材を求め、これを歴史的世界と相関関係のもとに置いた。つまり彼はローマの起源を古代ギリシア・ローマの伝説・神話の世界に求めたのみでなく、現実の歴史的世界をそこに投射させることにより、現実の狭い枠を越えるとき怨讐の克服もまた可能となることを教えたのである。

思うに、ここで述べられている英雄叙事詩観は、究極のところホメロスの精神(エートス)に通じるものではないだろうか。ウェルギリウスの作品には「歴史」という観念が新たに加わっているが、詩人の人間に対する見方とその運命を描く視点は、例えばトロイア王プリアモスとその仇敵アキレウスが語り合う場面を描いたホメロスの視点と本質的に違いはないように思われる。岡先生は論文でそこまではおっしゃらないのだが、この文章は私には非常に啓発的である。

さて、以上の二篇によって周囲にウェルギリウス旋風を巻き起こした先生は(その風はなお吹きまくっている)、次にホラティウスの世界を訪ねられた。そして、松平先生の後任の椅子に座られて最初の科研・総合研究の成果報告書『古典古代における伝統の継承と革新』(1982年、これは活版であった)に、「ホラティウス c.3.4の〈統一性〉」を掲載された。この非常に精密なテキスト解釈の論文では、『歌章』第三巻第四歌の全体が、「天から降りたまえ」という冒頭句をはじめとして高から低への動きによって支配・統一されていることが検証され、詩神ムーサの力の広がり大きさ、さらにその神的な力と詩人ホラティウスとの内的結びつきの強さが示されている。英雄というものを創りだすのは詩人の歌の力である。ホラティウスは抒情詩によって、しばしば政治家アウグストゥスを歌った。しかしそれはたんなる世俗的な賛歌ではない。宇宙を支配する神の力が詩人を動かしている。そしてこの詩でホラティウスは、そうした「予言者」(vates)としての自己の原体験を語っている。もし先生の考察にこのような補足(あるいは蛇足)を加えることができるならば、このラテン抒情詩考もまた、問題意識の点でギリシアの英雄詩論の延長線上にあると

言えるだろう。

ところでその後1984年に先生は、『法制史研究』34に「キケロの『国家論』——その指導者像(2.51)をめぐって——」を発表された。キケロの『国家論』に対する関心は、すでに同志社時代からその翻訳を発表されていることからわかるが(『同志社法学』108, 109: 1968, 1969年)、それから十数年を経て執筆されたこの論考では、キケロの思念の中にさまざまなラテン語の表現に包まれて具象化しつつあった国家共同体の理想的指導者像に光が当てられている。私はここにも、ギリシアの精神的風土からローマ的な土壌に移った際、民族の英雄観というものがどう変容するのかという先生の問題関心の一端を見ることができるよう思う。トロイアの野で縦横無尽に活躍するギリシアの英雄たちと違って、ローマの英雄はほとんどが国家と民族の指揮をとる政治家である。つまり、彼らは社会的人間である。しかし今なら、政治家を英雄視することは、未成熟な社会の現象か、あるいは第二次世界大戦の頃のように危機的な事態の徴候だと思われよう。だがローマの共和政時代の英雄は、たしかに政治家として現われるのだが、その本質は、ローマ人のきわめて倫理的な性格に根ざしている。こうした点について、岡先生はキケロのテキストに触れて次のように指摘される。

彼(国家の指導者)のほとんど唯一の義務と任務は、自己を陶冶し観察することをやめず、自己を見ならうよう他の人々によびかけ、自己の性格と生活の卓越によって、自己をいわば市民の鏡として示すことにある(2.69).

.....

しかしこの指導者が自己を市民たちのexemplumとして示すことは、市民たちがたんにこれを見ならうのみでなく、そうすることによって、彼らもまた自ら新たにexemplumとなることを含んでいる。これがexemplumの本来の働きである。

私はこの論文を読んでいると、キケロのラテン語の中から浮かび上がってくるローマ人の指導者像が、モラリストとしての先生ご自身の生き方と心の中で二重写しになってくる。他のどの論文でも同じだが、先生の緻密な文献考証はあくなき人間追求への情熱から発している。そしてテキストとは、先生にとって自己を見つめるための鏡のようなものではないかと思う。岡先生は、その鏡を練達の職人の手さばきで磨き上げる。例えばキケロを素材として仕上げられ

た鏡には、ローマ人の魂と対話する先生の姿が映っている。キケロの理想的指導者が政治という鏡に自己を磨いたように、先生は古典文献という鏡を磨きそこに自己を映す。おい、君の鏡には人間というものがちっとも映っていないじゃないか。exemplumという言葉は文字だけのラテン語じゃないんだ。そんな声が行間から聞こえてきそうである。

こうして岡先生の英雄像の探求は、「英雄伝説として見たヘーラクレースのathloiの問題」に始まり、ホメロス研究を経てキケロにまで至ったが、その視点は戦争や冒険の詩、あるいは政治の文学だけに限られてはいなかった。この世の中には、また別のタイプの英雄もありうることを、そしてラテン文学こそがそのような異なる英雄像をも育て上げたことを、最近のプロペルティウスに関する二篇（「プロペルティウスと神話——2.14; 2.15の解釈をめぐって——」『ギリシア・ローマ神話の形成と変質』1984年; 'Nox mihi candida. Propert. 2,15 and Catull.68', "Filologia e Forme Letterarie", Vol.III, 1987年）によって教えられた。愛の「誉れ」、不死への願い、そして死すべき身の自覚——愛を歌う詩人の心は生と死の間を激しく揺れ動き、その喜びと不安を神話世界に投影して魂の救済を希求する。そのとき、ギリシア神話に新たな生命が吹き込まれ、ラテン語による味わい深い言葉のパラドックスも生まれる。例えばプロペルティウスの「光輝く夜」という表現に触れながら、次のように先生は指摘される。

この生のあかしである喜びをもたらす夜、そこに迫る死の恐れと不安が
感じられるゆえに一そうまばゆく愛の喜びに輝く夜が nox candidaとして
とらえられたのである。 「プロペルティウスと神話」

今、この愛の詩の評釈文のあとに、例えば三十五年まえの英雄詩に関する次の文章を並べてみたらどうだろうか。

誉れというものは、畢竟、恐しい死の事実を蔽い隠していた仮面に過ぎなかった。誉れを求めることが決して不死へ通じる道ではないことを悟ったギルガメシュは、英雄としての生き方に訣別を告げ、不死を求めて彷徨の旅に発つ。ここにおいては、単に誉れを求める英雄的行為が発展的に否定されているとともに、生と死の問題から出発する新しい人間としての生き方が示唆されているのである。

「英雄伝説として見たヘーラクレースのathloiの問題」

古代オリエント叙事詩の主人公ギルガメシュと同様、ギリシアの英雄ヘラクレースもまた、「誉れを獲得するだけで満足することなく、さらに空しく不死を追い求める英雄」として描かれた（同上の論文）。ギリシアの英雄伝説考からラテン恋愛詩論に至るまで、先生が愛着をもって追究されたのは、このような、生の光と死の闇の間を揺らめく人間独特の不安な魂の在り方であったような気がする。「英雄」とは、このすべての人間に内在する生と死の明暗を最も強烈に、神々しく生きようとする者のことを言うのであろう。

岡先生は、大学での長い歳月をそうしたギリシア・ローマ文学のさまざまな英雄たちと心を通わせながら歩んでこられた。そして学問と人生に悩む多くの若い人々にいつも思いやりの言葉を掛けられた。先生の不屈の歩みと暖かい声に幾度も勇気づけられた一人として、深い感謝の気持ちをお伝えするとともに、どうかこれからも、あの英雄たちとともに人間探求の旅を続けられ、なお私たちの古典研究に心の糧を分かち与えてくださるようお祈り申し上げたい。